

日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

今回のゲストは名古屋市長の河村たかし氏。衆議院議員として国会でもテレビでも名古屋ことば丸出しで庶民型政治を主張し、みずから「総理を狙う男」と公言していた河村氏が名古屋市長に転身して、はたしてどんな政治を実現しようとしているのか。大学時代のクラスメイトである山内進副学長が、発想の原点にまで踏み込んできた。その応答からは、政治のあるべき姿にとどまらず、人の生き方や大学のあり方にまで及ぶ多くのことを読み取ることができるはずだ。





値下げをすれば売上げが伸びる。
商売も政治も大学も基本は同じです

名古屋市長

河村たかし氏

一橋大学副学長



山内 進

河村たかし氏の名古屋市長としての2大公約は、
市民税の10%減税と、地域委員会による都市内分権。
「わしが本家だ」という自転車街宣でも
「議員も市長も役人もパブリックサーバントだ。それを政治の原点にせにゃいかん」
「税金を払うほうはどえりゃあ苦労しとる。
税金で食っとるほうが極楽という現状は糾さにゃいかん」
「楽市楽座をつくって庶民を元気にした織田信長のような庶民革命をやりたい」と訴え、
名古屋市民の圧倒的な支持を集めた。その発想と情熱はいかにして生まれたか。
自己分析は大学時代の思い出話から始まった。



教え方に文句をつけて 先生にどえりゃあ怒られた

山内 ぼくらは、たまたま大学の同期生で……

河村 たしかクラスも一緒だった。1年の時のロシア語クラス。

山内 そう、K組でした。ということで、今日は君呼びでいきますが、河村君がロシア語を選んだのはどうしてなの。ぼくの場合は、ちょっとかっこつけていえば、ドストイエフスキーを原書で読んでみたいなんてことを思ってなんだけれど。

河村 40年以上も前の出来事ですからねえ、ようは覚えていませんが、単純に、「変わったことをやったれ」という。それに、あの頃はベトナム戦争があったりして、左がかったトレンドも

あった。なんとなく社会主義がええというような。ハッハッ。その後はぜんぜんちがう方向に進みましたが、当時は学生運動なんかに首をつっこんだりもしました。わけもわからんと。

山内 わがクラスにもクラス闘争委員会があった。

河村 ああ、そうでした。懐かしいなあ。けど、私は1年の頃は硬式野球部に入っておりまして、授業にはあんまり出とらんですよ。

山内 それでも河村君は、授業で先生に注文をつけたことがある。ロシア語の授業でも英語の授業でも。覚えてる？

河村 なんか言って、どえりゃあ怒られた記憶はありますが。

山内 こんな教え方ではダメだと。話せるようにならないことはもちろん、プラクティカルな役には立たない。これでは高校時代と同じじゃないかって文句を言ったんですよ。



河村 ほう。言われてみれば、思い当たる節がないでもない。

山内 ぼくは個人的にはどっちの授業もそう嫌いじゃなくて、大学の先生はやっぱりちがう、深みがあるなど感じていた。それもあって、その時の先生と河村君のやりとりは今も記憶に残っている。でも、その河村君が政治的なことに関心をもっていたという印象はまったくない。そうでもなかったの。

家の跡は継がんなんものだと 思い込んでいた

河村 もともと商売屋の件で、だから入ったのも商学部なんですけど、死んだ親父が言うには、わが家は尾張藩士の末裔で、サムライであると。だから、世のため人のために生きねばなら

ん。わしゃ商売は苦手じゃと。無茶苦茶な言いぐさなんですけど、私の大学での発言は、そういう親の元で育ったというせいもあるんじゃないかなあ。世のため人のために役立つという。

山内 なるほど。それが政治家への道にもつながるんですね。

河村 いやいや、そうはいつでも、当時の私には家業を継ぐという道しか見えてませんでしたね。従業員が4人か5人という古紙問屋だったんですが、そういうところの長男坊というのは、小さな頃からなんかやと仕事の手伝いをさせられて、家の跡は継がんなんものだとということが体に刷り込まれているというか、トラウマみたいなものになっておって、それ以外の道は目の片隅にも入らなんだんですわ。

山内 それで大学を出て真っすぐ家に帰っちゃったんだ。

河村 そうです。商売一途ですわ。まあ、やるからには上場



企業でもつくったれと思ってましたが、古紙業界というのは厳しい世界で、同業者から中卒も一橋卒も関係ないぞよと言われていた通りで、確かに関係なかった。ハハハ。たとえば大学で習った労務管理の手法を使おうと思っても、使う前に従業員が辞めちゃうんですわ。辞めてしまう従業員に対して一橋の学問はまったく適用できませんですよ。副学長の前でこんなことを言うと首を絞められるかもしれんけど。

山内 それでもけっこう頑張ったと聞いています。

河村 そりゃもう人の2倍も3倍も働きましたからねえ。ところが、新しい工場をつくらないかんという時に、親父がダメだと言うんですわ。そんなものをつくらしたら同業者の仕事を奪うことになる。同業者とは仲良くせないかん。“和をもって貴しとなす”べしだと。何を寝ぼけたことを言っとるかという話なんですわ、ほうかといつて親父を放り出すわけにもいかんかねえ、かくなるうちは自分が飛び出るしかない。

どんなに失敗しても 自分のせいにしてらあかん

山内 そこから司法試験への挑戦が始まったんですね。去年だったか、本学での特別講義でも話していましたが。

河村 そうです。それまでは頭を下げるばかりの仕事でしたから、この際、頭を下げんでもええ仕事はないかと考えて、

そりゃ検事だろうと。そこで、検察官を目指すことにしたんです。その頃にはすでに嫁さんも子供もおりましたから、昼間は働かないかん。勉強ができるのは夜中と土日だけだったんですが、それでも短答式のほうは一発で受けました。今にして思えば、それがいかんかった。甘く見たんですわ。東京に出て受験勉強に専念するということも考えたんですが、まあ、ええわ、そこまでせんとて受かるわと。結局、トータル9年間で短答式は4回受かっていますが、論文式のほうはついに突破できなかった。予備校での成績はいつもトップクラスだったんですがねえ。

山内 その頃に今の法科大学院のような制度ができていたら、結果もちがったでしょうにね。

河村 それです。それが政治に転換した大きな要因の一つです。わしらのように法学部は出とらん、夜しか勉強できんという人間の人生再挑戦、アナザーチャレンジには、それをサポートする社会的な仕組みも必要だと。そういう仕組みをつくるのは政治だというわけ。9年も10年も失敗しつづけると、人はもろいもので、全部自分のせいにしてしまう人が多いんですが、それはちがうんです。失敗したら、それは世の中が悪いからだ、そう考えないかんのですよ。これ、けっこう大事なことで。

人生に行き詰まった時には 選挙がおすすめてです

山内 それにしても、そこから政治家を目指すというのは、相当に思い切ったアナザーチャレンジですね。

河村 いや、人生の土俵際でうっちゃるには、選挙はええんですよ。なにしろ、一発通ってまやええんだ。これは一橋の後輩諸氏にもぜひ頭に入れておいてほしいんですが、人生に行き詰まった時には選挙がおすすめてです。政治家になるのは、た



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

河村たかし（かわむら・たかし）

1948年名古屋市生まれ。72年一橋大学商学部卒業。家業の古紙回収・卸売業に従事。中小企業の辛酸を体験。77年頃から検察官を志し、家業のかたわら夜学にて勉強。司法試験を9回受験、短答式では4回合格するもついに二次試験を突破できず、政界入りを目指す。2度の落選を経て、93年の衆議院議員選挙で初当選。以降、日本新党、新進党、自由党などを経て民主党に参加。議員宿舎の廃止、議員年金の廃止、議員ボランティア化などを主張。2009年国會議員を辞し、市民税の減税と都市内分権を2大公約とする「庶民革命」を掲げて名古屋市長選に出馬、大差で当選。主な著書に『おい河村！おみやあ、いつになったら総理になるんだ』（ロングセラーズ）、『この国は議員にいくら使うのか』（角川SSコミュニケーションズ）など。

たとえばラーメン屋さんになるよりはずっと簡単です。

山内 そんなものですかねえ。

河村 だって、ラーメンの味はだれにだってわかる。競争相手も多い。うまいラーメンをつくりつづけなければお客は来ない。ところが選挙は、この候補者がどんな人間か、さっぱりわからん。共通一次のような選抜試験もありゃせん。だから



ロクでもにゃあ奴でも通ってまう。まあ、なかには立派な人もおりますがね。

山内 しかし、落選することもある。

河村 ほくも2回落ちてますけど、あきらめずに、それなりのスキルを磨けばいいんですよ。今は小選挙区制になって、なおのこと通りやすくなってる。

山内 それはいいアドバイスかもしれない。ウチの学生は全体にちょっとまっとうすぎるくらいがありますから。ほくもそうだけど。

河村 副学長がまっとうでなけりゃどうなりますか。人間、まっとうであるに越したことはにゃあですわ。そういうことも踏まえて、もう一つ、選挙がええというのは、議員になりさえすればメシが食えるんですよ。外国では基本的に政治はボランティアなんですけど、日本では私腹を肥やすために政治家になるという選択も成り立つ。それではいけませんよという法規制はありま

すが、実際には今の世の中、税金を払うほうの苦しみを知ってか知らずにか、税金で食っておるほうは極楽なんです。こんなことをいうと、山内さんなんかにはひと言あるかもしれません。

山内 国立大学法人もかなりの部分は税金で運用されているけれど、毎年、予算が削減されていて本当に大変ですよ。

河村 ハッハッ。まあ、大学の先生はええとしましょう。それなりのスキルと役割をお持ちですから。とはいえ、それでも極楽の身分であることにはちがいない。

権力の座を不安定にするために 編み出された2大発明

山内 生きる手だてとして選挙があるということは、そういう考え方もあるんだろうと思いますが、では選挙に通ったとして、政治家の仕事って、どういうものなんですか。

河村 これは本にも書いたことですが、ある日、議員が一人残らず死んだとしましょうか。しかし、それで電気や水道がとまるかといったら、そんなことはない。コンビニやファミレスが閉まるわけでもない。公共サービスは役所がやっておる。議員が死んだって何も変わらんのですよ。つまり、政治というのは、なくてもいいものなんです。基本的にはね。

山内 なるほど、そこから出発するんですね。なくてもいいけれど、あるのはなぜかと。



山内 進 (やまうち・すすむ)

1949年北海道小樽市生まれ。72年一橋大学法学部卒業。77年同大学院法学研究科博士課程単位取得退学。成城大学法学部教授、一橋大学法学部教授、法学部長、理事等を歴任。2004年、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」の拠点リーダーに就任。06年より副学長(総務、財務、社会連携担当)を務める。専門は法制史、西洋中世史、法文化史。『北の十字軍』(講談社)でサントリー学芸賞受賞。その他『新ストア主義の国家哲学』(千倉書房)、『掠奪の法観念史』(東京大学出版会)、『決闘裁判』(講談社)、『十字軍の思想』(筑摩書房)など著書多数。

河村 そこから問い直しますと、政治の場合は安全保障というどえりゃあネタが一つありますけれど、それは別格としまして、議員に求められる一番の仕事は、端的に言えば、税金を減らすことなんです。税金を減らせんような政治は意味にゃあんです。なくてもいいんです、そんな政治は。

山内 ほう。昨今は増税もやむなしという論調が強いようですが。

河村 そういう話にだまされたいかんのですよ。そもそも政治の歴史というのは、徴税者に対する納税者の反抗の歴史です。徴税する側の権力者が固定化し、王様化しますと、贅沢三昧をして納税者を苦しめる。戦争もやらかす。そこで、そういう王様みたいな権力者をつくりださないために人類が編み出した大発明が、選挙制度なんです。

山内 納税者が、時に応じて徴税者の首をすげかえる。それが選挙だと。

河村 そういうことです。おまけにもう一つ、任期制という大発明もした。選挙に通っても一定の期間で有無をいわず辞めさせてしまうという。いずれも、権力の座を不安定なものにしようという人類の叡知が生み出した偉大なる発明です。ここからどういう答え



が導きだされるかといえば、議員は政治を生活の糧にしてはならないということです。こんな不安定な身分ではやっとなん、食うのもカツカツで、はや辞めたい、というようにならんとウソなんです。そうやって初めて議員のなすべき仕事の本質が見えてくる。



減税をしないかぎり 税金のムダづかいは無くせません

山内 私利私欲を捨て、世のため人のためにつくせというわけですね。お父上の遺訓を思いおこさせますが。

河村 まあ、三つ子の魂百までといいますからねえ。ともあれ、言っておるだけではあきませんので、私が名古屋の市長になって真っ先にしたのは、自分の給料をカットすることです。今まで通りだと税込で年収2500万円になるんですが、それを



800万円にした。800万というのは、名古屋市内で継続的に雇用されている市民が60歳になった時の平均年収です。私も60歳で、庶民と同じレベルの生活をする。だから、庶民の側に立った政治ができる。それが自明の理というものです。年収が2500万もあって、おまけに1期4年ごとに退職金が4220万も出る。40年でじゃ

ない、4年ごとに4220万ですよ。そんなご身分で、庶民のための政治なんかできるわけがにゃあんです。

山内 市長がそうでも、市の議員や職員の給与は今までと同じなんでしょ。

河村 市長が800万なら、ほかも将棋倒しでそれに見合った額になっていきますよ。

山内 それはきついな。そういう形で税金のムダづかいをなくしていこうということですか。

河村 いや、そこでみんながつまずくんです。今や党派の別なく税金のムダづかいをなくしようという大合唱をしていますが、たとえば農水省で100億円のムダが見つかったとする。100億くらいは簡単に出てきます。では、その100億円はどこに行くか。

山内 よく言われているのは、もっと重要な、たとえば福祉の充実にあてるというようなことですが。

河村 ところがタテ割り行政で、しかも予算は固定化されている。農水省で見つかったムダは、農水省のほかの場所でムダ



づかいされることにしかならんです。たとえ福祉にまわしたとしても、厚労省だってムダづかいの宝庫でしょ。とどのつまり、ムダづかいをなくすには、減税するしかないんですよ。そこに気づくのに60年かかりましたが、減税をせずに、税金のムダづかいをなくす、天下りをなくす、行政改革をするという言説は、すべて大ウソです。

山内 減税すれば、おのずとムダづかいができなくなるんだと。

河村 そういうことです。ですから名古屋市では来年度から市民税の10%減税を実施します。これ、驚くなかれ、日本の地方行政史上で初めてのことです。

価格競争のない世界には 進歩も勝利もない

山内 そういう河村市長から見て、一橋大学はどんな大学に見えますか。賛辞でも、注文でもいいんですが。

河村 そうですねえ。生徒数は、まあ、少ない方がええでしょうねえ。少ないから結束力が強くて、カンパもしてもらえる。私も選挙に出るたびにずいぶん助けられている。ありがたやあことですわ。それはええとして、授業料はどうなっとりますか。

山内 国立大学法人ですから、他大学とほぼ横並びで年535,800円ですね。

河村 その減額はできんのですか、授業料の値下げは。

山内 可能です。下げるのは自由です。逆に増額も20%まではできる。

河村 だったらただちに減額すべきです。そのぶん副学長の給料も下がることにはなりますが。ハッハッ。そうすると、寄付金集めなんかも今まで以上に力を入れんといかんということになる。寄付をするほうも、だったらもう一口ということになる。

山内 授業料はもう少し上げて、より高いレベルの教育をしたほうがいいんじゃないかという人もいますが、それではダメだと。

河村 ダメです。当たり前です。一橋は「キャプテンズ・オブ・インダストリー」を謳っている。

だったら、みずからもインダストリーの一員として率先して価格競争をせにゃいかん。商売で価格競争をして値下げをしたら、その値下げしたぶんはお客様の利益になる。だからお客様に喜ばれ、お客様が増えて売上げが伸びる。それと同じです。政治における価格競争が減税です。大学における価格競争は授業料の値下げです。なんなら交付金を返上したっていい。本学は国立大学で税金のムダづかいをしていると思われるかもしれませんが、実は私学以上に激しい価格競争をしています。それでもたくさんの人に支えられて、教育も研究も世界のトップを走っています。だから世界中から優秀な学生や学者も集まってくるんです。そう胸を張っていえるような大学になるための第一歩が、授業料の値下げです。

山内 国立大学の法人化に伴って本学も激しい競争にさらされていますし、お金のムダづかいはしていないつもりですが、とにかくわかりやすい、貴重なアドバイスをいただけたと思います。今日はありがとうございました。

